
泡沫

庵あん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫

【Nコード】

N0956Z

【作者名】

庵あん

【あらすじ】

かえろっ。混沌の中へ。醒めることのない泡沫の中へ。

（前書き）

こちらは「小説企画 Easter Rabbit」の参加作品です。

御題

「雪の匂いもしない水に沈みましょう、
いつか凍りついた花が散り逝くその日まで」

小説企画 Easter Rabbit

URL: <http://alice3333.hanabee.com/star/easter/index.html>

「ねえ、明日は何が食べたい？」

「チョコレート」

「チョコレート？」

「だって、バレンタインでしょ？ テレビでやってた」

「そっか、もう明日だね」

「そうだよ」

「でも、私のでいいの？ 好きな人くらい、いるでしょ？」

「いいよ。ショーコのこと好きだもん」

「本当に？」

「本当だよ」

青い海を臨む街の、海に面したデザイナーズ・マンションの、海が見える出窓に、いつも彼女は佇んでいた。陽当たりの良い、その場所がお気に入りなのか、彼女はずっと海を眺めている。寒い日は白いレースのカーテンにくるまったりして。白い漣さざなみに揺れる青い海を、夕日を宿したオレンジ色の海を、夜の闇を纏い月を浮かべる海

を、眺めている。

私はそんな彼女を気に入っていた。

随分と無口な人だったけれど、時折、太陽の様な笑顔を見せることもある。普段の素っ気ない澄まし顔が、にこやかに微笑んでくれるのだ。愛らしい。私は思わず微笑み返してしまう。

疲労困憊で帰宅しても彼女がそこに居るだけで、これからも生きていこうと思えた。眠れない夜も彼女はずっと傍に居て、夜が明けるまで真っ暗な海を眺めてくれた。手首を怪我して白い包帯を巻いていた時も、割れるような頭痛に苛まれている時も、もう死んで仕舞いたいと泣いた時も、彼女は傍に要てくれた。彼女は私に何の言葉もかけることはなかったけれど、その静寂しじまも心地良かった。

彼女との生活が始まってから幾分経った頃、驚いたことに、私の言葉に簡単な相槌を打ってくれるようになった。おはようと声をかければ、彼女も返してくれる。おはよう、と。最初の頃はそんな囁かな会話だったけれど、彼女が私に心を開いてくれたのだ、と嬉しく思った。

日々を過ごす内に、彼女との会話が徐々に鮮明なものへと変化する。

私はそんな彼女の成長が嬉しかった。希望だった。そうして、いつしか彼女に語りかけることが、私と彼女の日常的な行事となっていた。

「ねえ、ショーコ。今日は波が穏やかだよ」

「そうなの？ いつもと変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。穏やかなんだ」

「んー……。ん？ 私にはよく分かんないな。よく分かるね、すこ

いよ」

「いつも見てるからね」

「……そっか。ごめんね。いつも寂しい思いさせて」

「大丈夫だよ。此処からは海が見えるし、それに夜はショーコがいるから」

「次の休みは、ずっと一緒にいてあげるから」

「ありがとう。楽しみにしてる」

ふわり、と。彼女は笑った。

窓から零れる陽射しの中で。まるで、昔、絵本の中にいた妖精の様に。

あの頃は、その妖精が唯一の友達で、二人で一緒によく遊んでいた。私が海辺に行くと彼女はやって来る。そうして、二人で砂の攻城を作ったり、貝殻を集めて遊ぶのだ。当時は、それが楽しくて、時間を忘れて仕舞うほど。けれど、いつの間にか、彼女は現れなくなつて、大人になるにつれ、私もその友達のことを忘れていった。そんな、不思議な友達だった。イマジナリー・フレンドという言葉を知ったのは、彼女が現れなくなって、随分と経ってからだ。

ふと、窓際に佇む彼女に、あのどこか懐かしい潮風の匂いを感じることがある。今も、そう、キラキラと輝く彼女に、私は追憶の中の思い出を映し出している。

永久に、切に、この光に溢れた時間が続くことを願った。

「ショーコ、お月さまが二つも浮かんでるよ」

「そつだね、不思議だね」

「海は黒いのにな」

「黒いからだよ。月は太陽の光を反射してるんだ」

「そつなの？」

「そつだよ。だから、昼間は隠れちゃうんだ」

「そつか。いつしよにいられないなんて、可哀想だね」

その夜は、黒い空に、白く玲瓏と浮かぶ月が綺麗だった。波打つ海面は、月光を繊細に反射して。

暗い海と、静けさの中の潮騒と、青白い月明かり。今宵、私と彼女は初めて、お互いの肌を合わせた。二人とも、最もリラックスできる姿で。生まれたままの姿で。海に見える窓辺、月だまりの渚で。永遠を感じさせる波の音に抱かれながら。その水音に、吐息に、耳を尖らせた。

月光を受けて、白さを増した肌を彼女の指が撫でる。首筋から、ずっと下へ、優しく、なぞる様に。その快楽に思わず、甘い吐息が漏れた。彼女の指の軌跡を何度も辿って。彼女と繋がり合った神経を弾いた。互いに、呼吸が荒くなる。耳朶で呼吸が感じられる距離。やさしく、彼女の唇が私に触れた。その刹那、絶対零度を感じた。決して触れてはならないその背徳感に私は神経を侵される。波紋の様に波立って、その感動は全身へと広がる。そうして、螺旋を描いて、纏れ合う意識の中、私たちは堕ちてゆく……。波の中で、絡ま

り合う海藻の様に。

深海の底の更なる深淵の闇へ。
広大な絶対零度の牢獄の中へ。

「ねえ、シヨーク。私のこと愛してる？」

「ええ、愛しているわ」

「嬉しい。ねえ、もっと、して」

「もう、甘えんぼね」

「シヨークだって。かわいいよ、その顔」

「あなただって……」

いつまでも、この波間に漂っていられることを願った。

上気した彼女の頬が、私の頬に寄り添う。絡み合った指先を彼女は紐解いて。今度は舌を絡め合った。少しだけ、私より体温の低い彼女に再び熱が宿る。しなやかな指先が私に触れる度、私たちは不思議な感覚に捕らわれる。触っているような、触られているような、そんな浮游感に。

見上げれば、月だけが私たちを見ていた。それでも、何だか妬けて、白いレースのカーテンを引いた。彼女と二人きりになりたかった。この、愛おしい彼女を誰にも見せたくなかった。私だけの、私たちだけの、私たちにしかかった。

青く濡れる、淡い月明かりの中、フローリングの床にまで体温が宿り、絶対零度の焔が灯る。

「また汚れちゃったね。あとで拭いてあげるから」

「このままでもいいよ。シヨークの匂い、好きだから」

「でも……、」

「シヨーク。ひとつになろう。そうすれば、ずっといっしょだよ？」

「うん」

「いっしょにいこう」

彼女が手を引いて、私を誘う。やわらかい砂の上を、ふわふわと歩きながら。

潮騒の中へ。いつの間にか、忘れていた追憶の故郷へと。ゆらゆら、と。漂って。月光を散らす海面は、青く、暗く。水平線の少し上に浮かぶ月は、白く、儂く。その水は、冷たい。

海の匂いがした。

強い、海の匂い。彼女の匂い。

否、混沌だ。私たちはこの混沌から浮上したのだ。意識となつて。空の蒼さよりも、ずっと深い、青い遥かなる海の底から。幾重にも絡み合う、螺旋を描きながら。

もう一度、かえろう。そこで、永遠に愛し合おう。意識は混沌の中で溶け合って、混ざり合って。

醒めることのない、泡沫の中で。

いつまでも。

いつまでも――

「何でも自殺未遂を何度かやらかしてたみたいですよ」

「へえ、それで、今回は本懷を遂げたわけね。おめでたいことで」

「西園さん、それって死者への冒瀆じゃないですか」

「今更、モラリスト気取りか？ 結局、事件性は無し。ただの入水自殺。面倒くせエーだけだよ」

「またそんな言い方……」

「それにしても、この鏡、デカすぎねエーか？」

「そう……、ですか？ 女性の部屋ですし、姿見くらいは置いてあっても不思議じゃないですよ」

「お前から女性に関しての意見が出るとはね。経験、あんの？」

「どういう意味ですか？ ああ、それより、亡くなった赤城翔子さんは精神科への通院歴もあつたみたいですし、やっぱり、症状の進行が原因かと……」

「まったく……。そーゆーの、理解に困るね。それで、仏さんはどんな病氣だったんだ？」

「何でもカプグラ症候群って珍しい症例だったそうです。別名ソジの錯覚って言うらしいんですけど、自分に瓜二つな別人がこの世界に存在しているという妄想を持つ疾患だと担当医が」

「自分と瓜二つの別人、か。案外、近くにいたのかもな……」

誰もいなくなつた、がらんどうのワンルーム。

やわらかな陽光の注ぐ窓辺で、細い指の跡が無数に残る巨大な鏡が、きらきらと瞬いた。それは、この小さな部屋には不釣り合いな大きさの姿見。主の居ない部屋で、その鏡面は虚空を写していた。

白いレースのカーテンが揺れる。潮騒は絶えず、この部屋に流れ込んでいる。海風に乗って。

海を臨む街の、その一部を切り取った四角い窓の外。白い砂浜に足跡が刻まれていた。白と青の渚へと続く、二つの足跡。夕日を孕んだ大きな波が、それを呑み込んだ。

茜色の空の縁は藍色へ。

月は太陽を見送る様に、幽かに、浮かんでいる。
空の渚にて。

泡沫

The S a d i s t i c L o v e S o n g

是にて、了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956z/>

泡沫

2011年12月3日17時58分発行